

# 中世日本語資料の疑問文

——疑問詞疑問文と文末助詞との相関——

竹村明日香  
金水敏

## 0. はじめに

現代日本語における要説明の疑問文（以下、「疑問詞疑問文」<sup>1</sup>）には、(1a) のような直接疑問文と (1b) のような間接疑問文が存在する（以下、傍線部・[※] は稿者注）。

- (1) a. 昨日どこへ行きましたか? [直接疑問文]  
b. 彼がどこへ行ったかわからない。 [間接疑問文]

しかし、(1b) のような「疑問詞一カ」となる間接疑問文は、室町時代から江戸時代初期にかけて徐々に出現してきたものであり、初期の頃は抄物やキリシタン資料 (2) にわずかに確認されるに過ぎない（高宮 2005）。

- (2) 悪党が多う籠ってゐたれば、何たるもののしわざか存ぜぬなどと種々様々のことを語られた。  
（『天草平家』巻二、146）

従来こうした間接疑問文については、現代日本語との関連もあって、文末助詞に力をとる例が中心に論じられてきた。しかし一方で、間接疑問文が発生しはじめたころの中世日本語では、文末助詞にゾ (3a)、又はヤ (3b) をとる例も数多く確認できる。

- (3) a. 右馬、して兼平が兄の樋口の次郎はなんとなったぞ？  
（『天草平家』巻四、248）  
b. サント答へて宣はく、[…]<sub>[※86年の]</sub>この中に一度も凶事を与へ給はず、今日  
に至つて一命を与へ給う御作者に何として、悪口を申すべきやと。  
（『サントス』巻二、318）

特に (3a) のような文末助詞がゾの例は、中世の疑問詞疑問文として標準化しており、とりわけ聞き手から回答を要求する〈問い〉の表現において一般化している（磯部 1992 他）。対して、「疑問詞一カ」となるような文末助詞がカの疑問詞疑問文は、「疑問詞一ゾ」や「疑問詞一

<sup>1</sup> 本稿では以下、要説明の疑問文・wh 疑問文を「疑問詞疑問文」と呼び、要判定の疑問文・Yes-No 疑問文を「肯否疑問文」と呼ぶこととする。

ヤ」に比べて勢いが劣っており（山口 1990 : 119）、頻用されていたとは言い難い状態にある。

ではなぜ頻用度の点で劣る「疑問詞一カ」が、中世から間接疑問節として選ばれるようになったのか。本稿ではその理由を明らかにするため、ゾ・カ・ヤの文末助詞をとる疑問詞疑問文を比較・検討し、これらが言語行為（〈問い〉〈疑い〉〈反語〉）や統語構造といかに関わっているのかという点を主に追究する。そしてそれらの結果を統合し、間接疑問文成立への道筋を提示する。

## 1. 先行研究の整理と問題の所在

疑問詞疑問文の各表現がどのような言語行為と結びつく傾向にあったかは、おおよそ先行研究で明らかにされている。柳田（1985）は『竹取物語』と『天草版伊曾保物語』の疑問表現を「要説明」と「要判定」の疑問文に大別し、それらを〈問い〉〈疑い〉〈反語〉の三つの言語行為に分類して、それぞれで頻用される形式を【表 1】のように掲げている。

【表 1】柳田（1985 : 128-129 [表 11]） ※ 〈 〉は竹村補注。

	〈言語行為〉	〈中古〉 竹取物語	〈中世〉 天草版伊曾保物語
要説明の 疑問表現	問い	疑問詞（……）カ… …。 疑問詞……ゾ。	疑問詞……ゾ。
	疑い	疑問詞カ……。 疑問詞……ゾ。	疑問詞……カ。
	反語	疑問詞（……）カ… …。 疑問詞……。	疑問詞（…）カ…。 疑問詞……ゾ。
要判定の 疑問表現	問い	……ヤ……。 ……カ。	……カ。
	疑い	……ヤ……。 ……ヤ。	……カ。
	反語	……ヤ（ハ）……。 ……ヤ（ハ）。	……カ。

これによると、中世の疑問詞疑問文（上表での「要説明の疑問表現」）では文末助詞のゾとカで使い分けがあり<sup>2</sup>、「疑問詞一ゾ」が〈問い〉〈反語〉に、「疑問詞一カ」が〈疑い〉<sup>3</sup>で使用されていて、文末助詞ゾ・カの相違が言語行為の相違と相関していたことを窺わせる。

<sup>2</sup> 肯否疑問文（上表での「要判定の疑問表現」）でゾが使用されない理由は、中世期にゾが断定辞として使用されていたことによる（例：我は男<sup>ズ</sup>。『毛詩抄』巻三、237頁）。疑問詞をとらない肯否疑問文では、文末助詞にゾをとると肯定表現と同一になってしまうため使用されない。

<sup>3</sup> 〈疑い〉の「疑問詞一カ」は、対話相手に向けられている言葉であっても、表明する態度は答えを要求するというより疑っていると解し得るものである（柳田 1985 : 124 参照）。

イソボが言ふは、「今日まではこの家のお主なれども、明日は何とならせられるか」と言うて、先の諍ひを語つたれば、  
（『天草伊曾保』418）

上記のような疑問表現形式と言語行為の結びつきについては、中世の他資料でも確認されており、例えば覚一本『平家物語』でも「疑問詞一ゾ」に〈問い〉の性格が強く、要説明の疑問文として標準化してきていること（磯部 1992・1993）や、「疑問詞一ゾ」は近世前期には文末が「φ」「チャ」「カ」にとって代わられていることなどの報告がある（紙谷 2000）<sup>4</sup>。

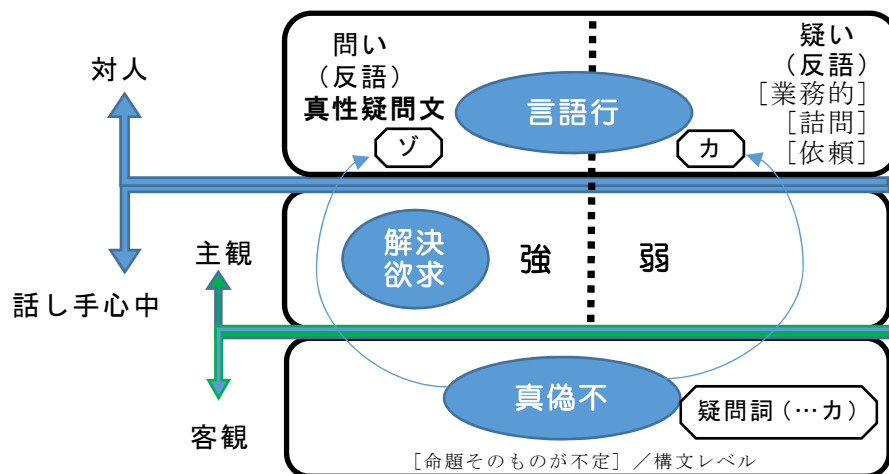
しかし一方で、ゾ・カがどのような疑問詞と結びつきやすいのかという点については未だ調査されたものがなく、また、「疑問詞一カ」の間接疑問文の成立に関しても、「疑問詞一ゾ」との統語的な違いがいかに影響したのか、あるいは〈問い〉〈疑い〉などの言語行為がいかに成立に関与したのかといった点については言及されたものが見当たらない<sup>5</sup>。

よって以下では、「疑問詞一カ」の間接疑問文としての成立を探るにあたり、疑問詞の種類とゾ・カとの結びつき（4.2 節）、「疑問詞一ゾ」と「疑問詞一カ」の統語的相違と言語行為との関連（4.3～4.4 節）について主に着目しながら考察を進める。

## 2. 疑問詞疑問文における三つのレベル

言語行為や統語構造と関連付けて疑問詞疑問文を分析するにあたり、本稿では、以下の【図 1】のような三層のレベルを想定する。

【図 1】 疑問詞疑問文（要説明の疑問文）における三つのレベル



※注：○ …中世の疑問詞疑問文における表現形式。[ ] …主に現代語で見られるもの。

【図 1】は、疑問表現が構文として構成されるレベル（最下層）から、話し手の心中・主観を経て（中層）、対人的な言語行為として発動されるまで（最上層）の段階を示している。疑

<sup>4</sup> 他に中世の疑問表現全般の調査に長瀬（1967）、反語表現に矢島（1995）、疑問表現の文末助詞がゾからチャに推移することについては外山（1957）などがある。名詞句位置のカについては衣畑・岩田（2010）参照。

<sup>5</sup> ただし八幡（2005）は本稿と同じく室町末期のカの性格を統語と意味（本稿での言語行為）の観点から考察しており、示唆に富むが、「一カ」が名詞的性格をもっていたことが間接疑問文の確立につながったと想定しており、本稿とは結論を異にする。

問文は「命題+モダリティ」に分けられるが（金水 2013：1）、その客観的な命題と主観的なモダリティを分けるのが最下層と中層のレベルである。最下層では命題そのものの真偽が不定であることが疑問詞によって示される（例：「誰」「何」「いつこ」）<sup>6</sup>。それらが話し手の心中を経る際、その真偽不定の命題に対する解決欲求が強い（中層左側）、弱い（中層右側）によって、言語行為として表現される時の文末助詞が異なってくると考えられる。

解決欲求の強い命題が対人的に示される場合、文末助詞はゾが選ばれ、〈問い〉の言語行為が行われる<sup>7</sup>。この〈問い〉は、解決欲求が強いゆえに、疑問詞部分の不定に対する情報提供を聞き手に強く求める。いわゆる真性疑問文とも呼べるものである。

(4) 右馬. してその三位入道は惣別は何たる人であったぞ？

〈問い〉（『天草平家』巻二、139）

一方、解決欲求が強くない命題を対人的に示す場合、文末助詞はカが選択され、〈疑い〉の言語行為となる。これらは〈問い〉と同じく疑問詞をとっているものの、解決欲求が弱いため、聞き手からの情報提供を積極的には要求しない。したがって自問・独言といった消極的な言語行為を果たすのみとなる<sup>8</sup>。

(5) 宗盛→清盛 「先の世に何たる契がござるか、一目見奉ったれば、あまりにおいとほしう存ずる。[…]

〈疑い〉（『天草平家』巻二、139）

すなわち中世日本語疑問詞疑問文でのゾとカの使い分けは、真偽不定の命題に対する話し手の解決欲求が強いか弱いかの差にあると考えられ、この相違が疑問詞の種類選択にも影響しているものと考えられる。以下では上記の想定を基に、まずゾ・カ（ヤ）における疑問詞の種類の違いについて調査する。

### 3. 調査資料と調査方法

調査資料には、キリシタン資料 2 作品と抄物 2 作品を用いた。主な考察は、口語キリシタン資料の『天草平家』で行い、抄物は補足的に用いた。

(6) a. 『天草版平家物語』（1592 年、口語）、『サントスの御作業』（1591 年、文語）

b. 『玉塵抄』（巻四まで）、『毛詩抄』（巻四まで）

（※傍線部は略称名として用いた。具体的な資料名は稿末記載）

<sup>6</sup> 疑問詞に加え、カが後続する場合もある。

<sup>7</sup> 〈反語〉は文末助詞がゾ・カいずれの場合にも現れる。よって【図 1】では両方の言語行為に含めた。

<sup>8</sup> 現代日本語ではこの疑問文の類が多く、「業務的疑問文」（例：[寿司屋] 何からにぎりましょう）、「反語・詰問」（例：なぜもっと早く起きない）、「クイズ・ゲーム」（例：[カードを取らせて] なぜそのカードを取りましたか？）などもある。

なお、中世期資料には係助詞が文中に位置して係り結びを生じる例（例：いつの—か—〔連体形〕、誰ぞ—〔連体形〕）や、係助詞と文末助詞が両方現れる例（例：いかなる—か—ぞ）もあるが、本稿では現代日本語との関連を考えるため、文末に現れる（7）の形式に限定して用例を採集し、会話文・地の文・心中思惟に分類した。

#### （7）疑問詞—ゾ、疑問詞—カ、疑問詞—ヤ

文末助詞ヤについては、J.ロドリゲス『日本大文典』に「Ca（か）とYa（や）は同じ意味を持ってゐる。Ya（や）は話しことばよりも書きことばに多く用ゐる。」（巻二、89v）とあり、文語資料で口語資料のカに相当する位置に見られると判断したことから採集した<sup>9</sup>。用例採集の際には、意味的に分裂文と通じやすく分類が困難な名詞述語文を除外した（例：何たる者ぞ）。またそれらに準じる、「あり」「ござる」が述語にくる例（例：何とござるぞ）も除いた<sup>10</sup>。

## 4. 調査結果

### 4.1 全体数

各資料での全体数は【表2】の通りである。

【表2】「疑問詞—文末助詞」の全体数

資料 形式	キリシタン資料		抄物	
	天草平家 (口語)	サントス (文語)	玉塵抄 (巻4まで)	毛詩抄 (巻4まで)
疑問詞—ゾ	145	95	27	118
疑問詞—カ	34	1	2	0
疑問詞—ヤ	0	31	0	0
疑問詞—他	2*	4**	22***	3****
計	181	131	51	121

※注1： \*「疑—ヤラ」「疑—ゾヤ」各1例。 \*\*「疑—ゾヤ」4例

\*\*\*「疑—ヤラ」21例、「疑—ヤゾ」1例。 \*\*\*\*「疑—ヤラ」3例。

注2：一文中に疑問詞が2つ以上含まれる文（例：いづくより何のためにここに来たらるぞ『サントス』巻一、141）は1例として数えた。よって【表3】～【表6】の疑問詞の用例数と上記の数値は一致しない。

どの資料においても文末助詞はゾが大半を占めており、カは口語資料、ヤは文語資料で用いられるという偏りがある。カ・ヤの用例は抄物には乏しいため、以下ではキリシタン資料に現れる「ゾ」と「カ（ヤ）」の疑問詞疑問文を対比的にみて検討する。

<sup>9</sup> また『日本大文典』では、ゾは「純然たる疑問の標し」（巻二、89v）であるが、時にはカがゾに代わることを指摘する。しかしその場合の状況や理由については言及がない。

○ある場合にはCa（か）は純然たる疑問の標しであって、Zo（ぞ）の代りに置かれる。その場合には疑問名詞の後に置く。例へば、Nandoquica?（何時か。）又は、Nandoquizo?（何時ぞ。）  
[…] Nanigotouo itaitaca?（何事を致いたか。）（巻二、89）

<sup>10</sup> ただし「何とござったぞ」「何とござらうぞ」のように、「ござる」や「あり」に助動詞が後接している例は除外していない。

#### 4.2. 疑問詞の種類と文末助詞の結びつき

まず文末助詞「ゾ」「カ（ヤ）」は、結びつく疑問詞の種類が異なる。『天草平家』の「疑問詞一ゾ」と「疑問詞一カ」を疑問詞別に分類したのが【表3】と【表4】である。

【表3】『天草平家』の「疑問詞一ゾ」

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何一	87	何と 44、何として 11、何に 9、何たる 4、何事を・何とて・何ほどの各 3、何の・何によって・何しに各 2、何としたれば・何とやうに・何の故に・何を各 1
なぜ一	32	なぜに 32
いづく・いづち・ いづれ・どこ一	8	いづく{へ/に}各 1、いづちへ 1、いづれが 1、どこ{で/へ/を/の} 各 1
いつ一	5	いつの 3、いつ 1、いつまで 1
いか一	8	いかが 4、いかほどの 2、いかに 2
誰一	4	誰に 2、誰{が/を}各 1
合計	144	

【表4】『天草平家』の「疑問詞一カ」

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何一	19	何と 12、何として 2、何者が・何たる・何に・何の・なんぼう各 1
いづく・どこ一	6	どこへ 2、いづく{に/へ/より}・どこから各 1
いか一	2	いかなる・いかで各 1
なぜ一	3	なぜに 3
いつ一	2	いつ{の/まで}各 1
誰一	1	誰が 1
合計	33	

ゾは「何一」系との結びつきが強く、中でも「何と」との共起が目立つ（30.5%）。

- (8) a. 重衡守護の武士にむかうて、「さてもこの女はいたいけな者ぢや：名をば何と言ふぞ」と仰せらるれば（『天草平家』巻四、302）
- b. 平家の人々〔※義仲の平家討伐を〕もれ聞いて、「これは何とせうぞ」と言うて、みな騒がれたれば（『天草平家』巻四、157）

しかし「何と」の 44 例のうち、約半数の 23 例が、(8b) のような「何とせうぞ」（12 例）、「何とあらうぞ」（6 例）、「何となつたぞ」（5 例）の三形式で占められている。したがって、「何と一ゾ」は慣用表現として固定化した言い回しであるために用例数も多くなったと考えられ、実質的には (9a-b) のように「なぜに」という理由説明を求める疑問詞が最も多いといえる（22.2%）。

- (9) a. 横笛「[…] たとひ世をこそ厭ふとも、なぜにかくて知らせなんだぞ？」（『天草平家』巻四、307）

- b. 倉光 「いかに兼康，なぜに敵にうしろをば見するぞ？返せ返せ」

（『天草平家』巻三、213）

カも「何一」系との結びつきが強く、「何と」との共起が目立つものの（36.3%）、ゾとは異なり、「なぜに」のような理由説明を要求する疑問詞との共起率が低い（9.0%）。

- (10) a. [※若君の六代は] 聖を見させられて，なにと思し召されたか，涙ぐませられたれば，

（『天草平家』巻四、387）

- b. 斎藤五・斎藤六→北の方 「敵四方をかこみまらしたれば，いづくよりもれさせられうか」と申せば

（『天草平家』巻四、384-5）

こうした疑問詞の種類と文末助詞との偏った結びつきについては、文語の『サントス』においても同様の傾向が見いだせる。『サントス』の「疑問詞一ゾ」が【表 5】、口語体での「疑問詞一カ」に相当する「疑問詞一ヤ」が【表 6】である。

【表 5】『サントス』の「疑問詞一ゾ」

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何一	70	何とて 31、何と 10、何たる 8、何事を 8、何の 4、何として 3、何とやうに・何しに各 2、何{より/を}各 1
いづく・いづ方	11	いづくに 5、いづくより 3、いづくへ 2、いづ方へ 1
誰一	8	誰に 4、誰にて 2、誰人の 2
いか一	5	いかが 2、いかばかりの・いかなる・いかほどの各 1
いつ一	1	いつごろ 1
いづれ一	1	いづれが 1
合計	96	

【表 6】『サントス』の「疑問詞一ヤ」（※口語での「疑問詞一カ」に相当）

疑問詞の種類	用例数	疑問詞の内訳
何一	18	何と 9、何として 3、何とて 2、何事{にて/を}各 1、何{に/たる}各 1
いか一	9	いかが 6、いかで 1、いかにとして 1、いかほど 1
いづく	4	いづく{に/より}各 2
合計	31	

【表 5】のゾでは、「何一」系の疑問詞が多い中でも“なぜ”“どうして”という意味をもつ「何とて」が最も多く約半数（70 例中の 31 例）を占めている（11a, b）。

- (11) a. アポストロー 息子いかに子，何とて汝の親より逃ぐるぞ？（『サントス』巻一、88）

- b. 辺りの人々これを見て父母を諫めて曰く，何とていらぬ辛勞をせらるるぞ？

（『サントス』巻一、46-47）

一方で、【表 6】の通り、ヤでもゾと同じく「何一」系との結びつきは強いが、『天草平家』のカの場合と同様に、“なぜ”のような聞き手に理由説明を求める疑問詞との共起率は低い（何とて 6.4%）。

以上のように、キリシタン資料ではゾとカ（ヤ）で選択される疑問詞の傾向が異なっており、ゾでは理由説明を求める“なぜ”を表す疑問詞（「なぜに」「何とて」）との共起率が高く、一方でカ（ヤ）はそうした疑問詞との強い結びつきが見いだせないということが指摘できる。

これらの差異には、前節 2 節で提示した「解決欲求の強弱」が関わっていると推定される。「疑問詞一ゾ」では、真偽不定の命題に対する解決欲求が強いために、話し手は「なぜに」「何とて」という疑問詞で、不定に対する理由説明を聞き手から積極的に得ようとする。しかし「疑問詞一カ」では命題に対する解決欲求が弱いため、聞き手から理由説明を得ようとするよりもむしろ不定の命題そのものを〈疑い〉（例：自問）として言語行為に表すため、「なぜに」「何とて」の疑問詞との特段の結びつきがないと予想されるのである。

#### 4.3 言語行為の再検討—〈問い〉〈疑い〉〈反語〉の分類—

では〈問い〉〈疑い〉〈反語〉の言語行為そのものは、「疑問詞一ゾ」「疑問詞一カ（ヤ）」とどのように関わっているのだろうか。本節では柳田（1985）で検討されなかった、言語行為の使用場面（会話／地の文／心中思惟）に注目して疑問表現との関連を再検討する。

##### 4.3.1. 分析方法

宮地（1971）、柳田（1985）、山口（1990）、安達（2004）等を参照して言語行為を以下の通り 3 分類し、さらに「会話文」「地の文」「心中思惟」に下位分類した。

- 〈問い〉 聞き手が存在し、その聞き手から、疑問詞で表された不定についての明確な説明を要求するもの。
- 〈疑い〉 聞き手がない、あるいは存在していてもその疑問詞で表された不定に対して明確な回答を出せる人物がないと判断できるもの（自問・心情吐露の独言など）。
- 〈反語〉 疑問文の形式をとっていないながら、すでに否定の判定を内に籠めており、聞き手から疑問詞に対する具体的な説明を求めていないと判断できるもの。

本稿では上記のうち、特に〈問い〉と〈疑い〉に注目する。

『天草平家』と『サントス』における上記の 3 分類が、以下の【表 7】【表 8】である。



【表 7】『天草平家』疑問詞疑問文の言語行為

		ゾ	カ	ヤ
〈問い〉	会話	71	3	-
	地	-	1	-
〈疑い〉	会話	15	6	-
	地／心中	7 (4/3)	19 (14/5)	-
〈反語〉	会話	45	5	-
	地／心中	7(6/1)	-	-
合計		145	34	0

注：( ) の外は「地の文」と「心中思惟」の合計数。( ) 内は左が「地の文」、右が「心中思惟」の用例数。

【表 8】『サントス』疑問詞疑問文の言語行為

		ゾ	カ	ヤ
〈問い〉	会話	72	-	7
	地	2	-	-
〈疑い〉	会話	5	-	4
	地／心中	11 (10/1)	1 (0/1)	12(12/0)
〈反語〉	会話	5	-	3
	地／心中	-	-	5 (5/0)
合計		95	1	31

以上のうち、『天草平家』（【表 7】）からは次の 2 点が指摘できる。

- (12) a. 「疑問詞一ゾ」は、主に〈問い〉で用いられ、聞き手が存在する会話文の主節で使用される例が中心をなす。
- b. 「疑問詞一カ」は〈疑い〉を表す例が多く、地の文・心中思惟を中心に用いられる。〈問い〉の例もあるが、それらは詰問調であるという特徴がある。

(12a) は、「疑問詞一ゾ」が〈問い〉を中心に用いられるという先行研究の指摘と一致する(磯部 1992 他)。これらは (13a-b) のように話し手が聞き手に対し積極的に働きかけ、疑問詞の不定部分に対する明確な回答を要求するものである。

- (13) a. 右馬. してその三位入道は惣別は何たる人であったぞ？

〈問い〉(『天草平家』巻二、229)

- b. 宗盛この人々 [※維盛ら] をお見つけあってから, [...]「さて今まではなせにおそかったぞ」とあつたれば,

〈問い〉(『天草平家』巻三、190)

一方、「疑問詞一カ」は〈疑い〉に多く見られる。したがって心中思惟 (14a) や地の文 (14b) が中心となる。

- (14) a. 成親卿 「あはれこれは日頃のあらましごとが漏れ聞こえたと見えた：誰が漏らいたか，さだめて北面のものどもがなかにあらうず」と思わぬことなう案じ続けておちやつたところに，〈疑い／心中思惟〉(『天草平家』巻一、27)
- b. 池の大納言殿と申す人は館に火をかけて，これも出らるるが，何と思はれたか，道から手勢三百余りを引き分けて，赤旗をばみな切つて捨てて，都へ引き返されたれば 〈疑い／地の文〉(『天草平家』巻三、188)

会話文にも用いられることはあるが、(15a) のように、聞き手に対する働きかけは弱く、どちらかというとう回答を得られぬまま自身の当惑を一方的に吐露するだけの発言となっている。

(15b) も会話文ではあり、聞き手はいるものの、相手も事情を知らないため、具体的な回答は求めていないと理解される例である。

(15) a. 「法皇のござらぬは、どこへ御幸なされたか」と言ひあはるる声に聞きな  
いて、〈疑い／会話〉(『天草平家』巻三、180)

b. 〔※葉を踏み敷く音がして〕女院「あれ見よ、これほどに人目のまれな所に、何たる人の  
来るか、忍ぼうずる事ならば、忍ぼう」と仰せられたれば、  
〈疑い／会話〉(『天草平家』巻四、373)

その他、「疑問詞一カ」がゾの場合と異なるのは、(16)のように会話文で用いられる〈問い〉で、聞き手に対して詰問調で問う例が見られるという点である。

(16) a. 斎藤五、斎藤六大覚寺へ参って「北条はすでに明日たちませうずるが、なぜ  
に聖はまだ見えさせられぬか」と申せば、  
〈問い／会話〉(『天草平家』巻四、388-389)

b. 重盛 〔※→清盛〕「たとひいかなる僻こといできるとも、君をば何とさせられう  
か 〔※語釈：法皇をどうなさるおつもりだろうか〕」と、言ひすてて、  
〈問い／会話〉(『天草平家』巻一、49)

(16a) は、明日にも北条に斬首されそうな若君を案じる斎藤五・斎藤六が、助けに来ない聖のことを北の方に問い詰める場面である。(16b) は、重盛が父の清盛に法皇の処遇について問いかける場面であるが、直後に「言ひすてて」とあることから、聞き手の回答を期待するものではないことが推測される。

また次の(17a)の例は、戦場に妻子を連れてこなかった維盛に対して投げかけられた〈問い〉の「疑問詞一カ」である。「？」があるため一見純粋な質問のようにも思われるが、(17b)の覚一本では、「などや一ぞ」とあり、回答を求めるよりも、詰問調で責めたてる〈反語〉に近い問いであると考えられる。

(17) a. 宗盛「なぜにそれ 〔※息子の六代殿〕はお連れあらなんだか？」  
〈問い／会話〉(『天草平家』巻三、190)

b. 大臣殿「などや心づよう六代どのをば具し奉り給はぬぞ」  
(覚一本『平家』巻七、110)

まとめると、「疑問詞一ゾ」は会話文の主節における〈問い〉が中心であり、聞き手に積極的に働きかけて情報提供を要求する言語行為であると言える。一方で「疑問詞一カ」は、心中思惟や地の文で示される〈疑い〉が中心をなし、聞き手への働きかけは弱く、相手から情報提供を求めないことが多い。〈問い〉の場合も詰問調の例が見られ、この場合も聞き手からの回

答を得るよりも自身の心情を吐露することが中心の言語行為であると見なし得るものである。

すなわち、言語行為の使用場面においても、聞き手の「解決欲求の強弱」が関わっており、ゾはその解決欲求の強さから、聞き手に直接問いかける会話文の主節に用いられ、反対にカ（文語ではヤ）は、解決欲求が弱いために、聞き手に直接問いかけない地の文や心中思惟での〈疑い〉、あるいは具体的な回答を期待せず一方的に問い詰める詰問調の〈問い〉で用いられると考えられるのである。

#### 4.4 「疑問詞一カ」の統語構造

##### 4.4.1 二文連置

では解決欲求が弱く、〈疑い〉の言語行為をとる「疑問詞一カ」は、どのような統語構造で現れ、またそれがいかに間接疑問文形成への契機となったのだろうか。

『天草平家』の「疑問詞一カ」を観察すると、間接疑問文は次のような注釈的二文連置（以下、二文連置）の形が契機となったことを窺わせる例が見られる。地の文を（18）、心中思惟を（19）に示す。

（18）忠度はどこから引き返されたか、侍を五人連れて、俊成卿の宿所にうち寄せて見らるれば、（『天草平家』巻三、181）

（19）<sup>〔※成親卿〕</sup>「あはれこれは日頃のあらましごとが漏れ聞こえたと見えた：誰が漏らいたか、さだめて北面のものどもがなかにあらうず」と思わぬことなう案じ続けておちゃったところに、（(14a) 再掲『天草平家』巻一、27）

これらの「疑問詞一カ」は、文としての独立性が高く、後続の文と合わせれば、二つの文が連置されていると解釈されるものである。注目されるのは、こうした二文連置と見られるものの中に、次の（20）のような、二文連置と間接疑問文の中間に位置するような「疑問詞一カ」の例が存在する点である。

（20）光能卿「当時はわが身も官をもやめられて心苦しい折節ぢゃ：また法皇も押し寵められさせられてござれば、何とあらうか、知らねども、うかがうて見う」と言うて、（『天草平家』巻二、146）

「何とあらうか」の部分は、直後に「，」があるため挿入された一文と考えられるが、この「，」がなければ、傍線部は現代語の間接疑問文とほぼ同等と見なしうるものである。

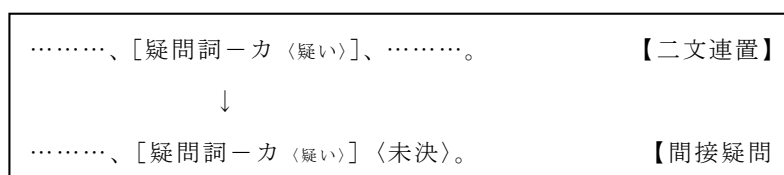
以上から考えると、「疑問詞一カ」の間接疑問文は、上記（18）・（20）のような二文連置の構造を経てから、現代語のような節による間接疑問文を形成するようになったことが推測される。室町～江戸期の間接疑問文を調査した高宮（2005：95）が「室町時代と江戸時代の間接疑問文は、現代のものに比べて、[…]未だ文中の疑問文が文としての独立性を保持した構文と

して位置付けられるものである。」と指摘するように、「疑問詞一カ」を節にとる間接疑問文も、文としての独立性が高かった構文から徐々に変化して間接疑問文へと推移したものと考えられる。

#### 4.4.2 言語行為と統語構造の相関性

間接疑問文が二文連置の構文を契機として発達したとする指摘は、高宮(2004・2005)、Kinsui(2007)に指摘がある。その推移を図示すると【図2】のようになる。

【図2】二文連置から間接疑問文への推移



高宮(2004)は、「一ヤラ(ウ)」を疑問節にとる間接疑問文の成立について考察し、(21a)のような注釈的二文連置の段階を経て、(21b)のような間接疑問文が成立したと推定している。

(21) a. ナントシタ心ヤラウ 論語ニハ言語ヲ政事之上ニヲイタガ司馬遷ハ政事ヲ上ニヲイタソ  
(史記抄・十・43オ⑤)

b. 世説ニハ注カナイ物チヤホトニ何ト義理ヲ付ウスヤラ知ラヌホトニ推シテ義ヲ付ルソ  
(蒙求抄・五・21オ⑥)

高宮(2004: 118(29)(28)より)

前掲(18) - (20)と併せて考えるならば、「疑問詞一カ」をとる間接疑問文においても、上記の「ヤラ(ウ)」の場合と同様に、二文連置の段階を経て成立したものと考えられる。

ところで二文連置から間接疑問文へと発達する際に重要な点は、「疑問詞一カ」に後続する述語のタイプが、〈未決〉〈既決〉〈対処〉の三タイプ<sup>11</sup>(藤田2000)のうち、(22)のような〈未決〉から現れてくるといふ点である(高宮2005)。

(22) 上に産んだか下に産んだか存ぜぬ。(エソポ・16⑭)

(高宮2005: 104(3)、波線は稿者補注)

<sup>11</sup> 藤田(2000: 533-539)から〈未決〉〈既決〉〈対処〉についてまとめると次の通り。

未決: 懸案(=答えられ、解決されるべき未定事項)が未決であるもの。

(例) わからない、知らない、覚えていない、不思議がる、疑問に思う、怪しい

既決: 懸案が既決であるもの。

(例) 知っている、明らかだ、判断がつく

対処: 懸案を未決から既決の方向へ推し進めようと対処がなされることを示すもの。

(例) 考える、明らかにする、量る

特に、室町時代から江戸時代にかけての間接疑問文の述語では〈未決〉、それに次いで〈対処〉が多い。〈既決〉の述語が現れにくい理由に対して、高宮（2005：96）は、「どうすればいいのだろうか」という疑問文が表す不確定の事態と、確定していることを表す〈既決〉の述語が、反対の内容を表すことから、両者が結びにくかったためと推定している。

本稿ではこれに加え、「疑問詞一カ」が〈未決〉の述語を後続させやすいのは、「疑問詞一カ」が〈疑い〉という消極的な言語行為であることが関与していると考えられる。4.3.1に既述した通り、「疑問詞一カ」の〈疑い〉は、解決欲求が弱く、聞き手への働きかけが消極的な言語行為である。したがって〈疑い〉を提示した直後には、その〈疑い〉に対する自身の判断を後続させやすくなる。その判断が、多くの場合、〈未決〉で表現されたものと考えられる。

〈疑い〉の直後に〈未決〉の述語が後続する例は、抄物の肯否疑問文に散見する。『玉塵抄』では、「一カ」という〈疑い〉を表す肯否疑問文で、「知ラヌ」「心得ヌ」といった〈未決〉の述語が後続する例が複数見られる。

- (23) a. 通ト云ハ。 カラノリヤウメノコトカ。 シラヌソ。 (『玉塵抄』 卷一、93)  
b. 俘ハトリコトヨムソ。 メシウトノコトソ。 シハラレタ。 メシウトナリ。 ユ、  
ノ俘ト云カ。 心エヌソ。 (『玉塵抄』 卷一、129-130)  
c. 戚足ハ。 シムトヨムソ。 チイザウトリツホメタコトカ。 ヨウモエ知ヌコト  
ソ。 (『玉塵抄』 卷二、225)  
d. 洞庭君ハ。 仙女ナリ。 湘妃ヲ云タカ。 シカトハ。 ヲホエス。  
(『玉塵抄』 卷二、250)

このように、〈疑い〉を示した直後に、その判断として〈未決〉の述語をとる傾向が肯否疑問文・疑問詞疑問文ともにあり、それが間接疑問文成立への契機となったと思われる。

なお、抄物では「疑問詞一カ」が少ないが、調査範囲内ではわずかに(24)の例があり、それは次のように二文連置を生じ、後続の文は〈未決〉で結ばれている。

- (24) タレモ。 嬰ヲ。 ヒキタテハ。 宦ニモ。 スムルモノナイ心。 タスクルモノナセニ。  
孺子老秃ヲ。 トギニ<sup>12</sup>シタコトカ。 ネンゴロニ。 心エワケヌソ。  
(『玉塵抄』 卷四、466)

以上をまとめると、間接疑問文は、構文的には二文連置を契機として発達したと推定される。これは、係り結びが二文連置から発達したと推定される（野村 1995）のと軌を一にしており注目される。また、その二文連置は、「疑問詞一カ」が、相手に積極的に働きかけて情報提供を求める〈問い〉の言語行為ではなく、むしろ働きかけの弱い〈疑い〉の言語行為であったからこそ、〈疑い〉に対する判断（＝〈未決〉）の文を後続させやすく、それが二文連置から間接

<sup>12</sup> 「ニ」は一部虫損あり。

疑問文へ移行する契機となったと考えられる。

## 5. 文末助詞「ゾ」と「カ」の相違

最後に、文末助詞ゾ・カの性格の異なりについて述べる。まずここまで観察した中での「疑問詞一ゾ」と「疑問詞一カ（ヤ）」の特徴について整理する。

【表 9】

	疑問詞一ゾ	疑問詞一カ
疑問詞	「なぜに」が多い。	「なぜに」との強い結びつきなし。
言語行為	〈問い〉が多い。	〈疑い〉が多い。 (〈問い〉では詰問調)
使用場面	会話文	地の文・心中思惟
構文的特徴	主節が多い	注釈的二文連置になりやすい。

これらから考えると、「疑問詞一ゾ」は現代語での「一ノカ」というノダ文に近い特徴を多く備え、反対に「疑問詞一カ」はノを伴わない「一カ」の疑問文に相当する特徴を多く備えていると推測される。

現代語においてノダ文になる疑問詞疑問文の特徴には、次のような点がある(益岡・田窪 1989、野田 1997 参照)。

- (25) a. 「なぜ」「どうして」の疑問詞をとる場合には、原則としてノダ文になる。

(例) なぜそんなに英語が上手なんですか？

- b. 主節の疑問詞疑問文の場合、普通体では、原則としてノダ文になる(丁寧体ではノダ文でなくてもよい)。

(例) 誰がそんなことを言ったの(か)？

以上の二点の、「なぜに」という疑問詞との結びつきが強いこと、会話文での主節の疑問詞疑問文で用いられやすいことから考えると、これらの特徴を備える「疑問詞一ゾ」は、現代語でいう「一ノ(カ)」というノダ文の疑問文に近いと考えられる。

一方で、中世の「疑問詞一カ」の特徴は、次の(26a-b)のような、現代語でのノを伴わない疑問詞疑問文の特徴に合致する点が多い。

- (26) a. 自問型の疑問詞疑問文は、普通体・丁寧体共にノを伴わない「一カ」を使っ

てよい。(例) あのノートはどこへやったか。

- b. 詰問調の場合の疑問詞疑問文は、ノダ文にならない。

(例) なぜ黙っていた？

心中思惟で多用される自問型の疑問文ではカが使用され（前掲 14a）、また、詰問調でもカが使用される傾向にある（前掲 16a-b）。

以上から考えると、「疑問詞一ゾ」のゾは、おおむね現代語のノダに相当し、「疑問詞一カ」のカは現代語のカに相当するものであったと推測される。

## 6. まとめ

本発表では、疑問詞疑問文の「疑問詞一ゾ」と「疑問詞一カ」を比較し、主に次の点を明らかにした。

- (27) a. 文末助詞ゾは理由説明を求める疑問詞「なぜに」「何とて」との結びつきが強い。反対に、文末助詞カにはそうした疑問詞との強い結びつきが見られない。
- b. 上記 a の相違には、真偽不定の命題に対する話し手の「解決欲求の強弱」が関わっていると考えられる。命題への解決欲求が強い場合、聞き手から積極的に情報提供を求める〈問い〉の言語行為が行われやすく、「疑問詞一ゾ」が会話体の主節で用いられやすい。しかし、命題の解決欲求が弱い「疑問詞一カ」では、聞き手への働きかけが消極的であり、〈疑い〉という言語行為が心中思惟や地の文で果たされることが中心となる。
- c. 統語的にみた場合、中世日本語の「疑問詞一カ」は、文としての独立性が未だ高く、後続の文と二文連置を形成する例が多い。「疑問詞一カ」は〈疑い〉という消極的な言語行為を示していたため、自己の判断を示す文を後続させやすく、二文連置を形成しやすかったと思われる。その後続する文の述語は〈未決〉が多く、その二文連置が間接疑問文へ発達する一つの契機となったと推定される。
- d. 現代語の疑問文と対照させると、「疑問詞一ゾ」はノダ文になる疑問文と合致する点が多く、反対に、「疑問詞一カ」はノダ文とならない疑問文と一致する特徴を多く備えている。

間接疑問文の成立においては、文末助詞や疑問詞を、統語構造、言語行為といった観点と総合的に関連付けて今後も議論してゆく必要がある。本稿では扱わなかった〈反語〉がいかに位置づけられるかも今後の重要な検討課題と考えられる。

### 【参考文献】

安達太郎（2004）「疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き」『京都橘女子大学研究紀要』31, pp.250-235（左開き）

- 磯部佳宏（1992）「『平家物語』の要説明疑問表現」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会編『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院, pp.293-308
- 磯部佳宏（1993）「『平家物語』の要判定疑問表現」『日本文学研究』29、梅光学院大学、pp.187-200
- 紙谷榮治（2000）「中世における疑問表現について」『国文学』80、関西大学国文学会, pp.72-82
- 衣畑智秀・岩田美穂（2010）「名詞句位置の力の歴史：選言・不定用法を中心に」『日本語の研究』6-4、pp.1-15
- 金水敏（2013）「日本語疑問文研究の課題」第2回「日本語疑問文の通時的・対照的言語学的研究」研究発表会（2013年12月7-8日、於大阪大学）ハンドアウト
- 高宮幸乃（2004）「ヤラ（ウ）による間接疑問文の成立：不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15、pp.124-111（左開き）
- （2005）「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16、pp.104-92
- 外山映次（1957）「質問表現における文末助詞ヅについて—近世初期京阪語を資料として—」『国語学』31、pp.37-46
- 長瀬富子（1967）「室町時代の疑問表現——助詞を中心として——」『国文学 言語と文芸』9-5、pp.44-53
- 野田春美（1997）『「のだ」の機能』くろしお出版
- 野村剛史（1995）「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9、pp.1-27
- 藤田保之（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 宮地裕（1971）「疑問表現をめぐる」『国語国文』20-7、pp.1-16
- 矢島正浩（1995）「天草版平家物語における反語表現：古典平家物語との比較を通じて」『国語国文学法（愛知教育大学）』53、pp.47-63
- 柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂出版
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院
- 八幡章雄（2005）「室町末期における疑問助詞カの性格」『名古屋大学国語国文学』97、pp.1-15（左開き）
- Kinsui, Satoshi. (2007) *The Interaction between Argument and Non-argument in the Diachronic Syntax of Japanese, Current Issues in the History and Structure of Japanese*, Kurosio Publishers. pp.253-261
- 【調査資料】※下線部を資料略称名として用いた。
- 『天草版平家物語』（底本：大英図書館蔵本、1593年）：江口正弘編（2010）『天草版平家物語 影印編』新典社、江口正弘注釈（2009）『天草版平家物語全注釈』新典社
- 『サントスの御作業』（底本：オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵本、1591年刊）：H. チーリスク・福島邦道・三橋健解説（1976）『サントスの御作業』勉誠社、福島邦道（1979）『サントスの御作業 翻字研究篇』勉誠社
- 『日本大文典』：ロドリゲス原著・土井忠生訳註（1955）『日本大文典』三省堂



『玉塵抄』(底本：国立国会図書館蔵本、永禄六 [1563] - 慶長二 [1597] 年)：中田祝夫編 (1970)

『玉塵抄 (一)』勉誠社

『毛詩抄』(底本：京都大学附属図書館・清家文庫蔵古活字本)：清原宣賢講述、倉石武四郎・小川環樹

校訂 (1996) 『毛詩抄 詩経 (一)』岩波書店

覚一本『平家物語』(底本：龍谷大学図書館本)：高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注

(1960) 『平家物語下』岩波書店